

# 臨地実習指導における指導者以外の看護師の意識

かがわ総合リハビリテーション病院 看護・療育部 障害者病棟  
看護師 村山 まさみ、秋友 ミカ、西村 かをる

キーワード：臨地実習指導、看護師、意識、連携

## 要 旨

障害者病棟における看護師の臨地実習に対する思いを明らかにすることを目的に無記名自記式質問調査研究を行った。調査対象者 22 名のうち 19 名が回答 (86.3%) し、臨地実習の看護領域について知っていたのは 13 名 (68.4%)、そのうち実習目標・目的を知っていたのは 4 名 (30.7%) であった。自由記載は、75 の総データから 20<コード>、そこから 8 [サブカテゴリー]、【実習指導の醍醐味】、【学生に対する指導力の未熟さ】、【臨地実習に対する興味・関心】、【臨地実習指導者からの周知不足】の 4 カテゴリーが導き出された。

看護師の臨地実習に対する意識を高め、臨地実習を受け入れる環境を整えるためには、<実習を受け入れる心構え>や<今の時代に応じた教育的な関わり方>を知りたい、<役割を明確にしてほしい>ことから、臨地実習の目的、指導内容、指導方法を分かりやすく揭示・周知し、看護師間で統一する必要性が示唆された。

### 1. はじめに

臨地実習 (以下、実習とする) は、カリキュラムの一環の授業であり、学校で学んだ看護に必要な知識・理論、演習で獲得した技能を実践し統合する学習の機会である。実習において学生を支援する臨地実習指導者 (以下、指導者とする) の役割として、山田らの研究<sup>1)</sup>では『実習指導の準備』『実習の受け入れ準備』『学生指導』『病棟スタッフとの連携』『教員との連携』が明らかになっている。中でも病棟スタッフとの連携の役割の具体的役割として、『実習目的・目標についてスタッフの理解を促進する』が示されている。病棟スタッフがそれらを理解して学生に関わることで、病棟として統一した支援ができ、学生にとって学びの多い実習に繋がると考える。

障害者病棟 (以下、当病棟とする) では、指導者が主となり学校との事前打ち合わせ、実習オリエンテーション、委員会に参加し、実習に関わっている。そこで得た情報は専用ファイルに綴じ、いつでも誰でも閲覧できるよう詰所に保管し、病棟カンファレンスの場でも指導者以外の病棟看護師 (以下、看護師とする) へ周知している。しかし、どこまで周知・理解されているかは不明である。そのような中、勤

務の都合で看護師が学生と一緒に受け持ち患者のケアを行い、指導をしている現状がある。学生は看護師と関わることで、より多くの看護観にふれる機会となり、また看護師にとっても自身の看護を振り返る機会となり、相互に自己成長に繋がるよい機会になるのではないかと考える。

指導者以外の看護師を対象とした先行研究では、看護師は実習指導に対してとまどい<sup>2)</sup>、不安、困難感、喜び、達成感等を感じていた<sup>3)</sup>。また実習内容の伝達方法<sup>4)</sup>や役割を明確にし、役割意識を高めていく必要性が示唆されている<sup>5)</sup>。しかし、障害者病棟における看護師を対象とした実習に対する思いを明らかにした研究はほとんど見当たらなかった。障害者病棟の実習指導は、実習要綱に示される実習目標と併せて、障害をもちながら生活していくとはどういうことか、障害者が自立するとはどういうことかを、指導者は入院時から患者家族が退院後の状況を想像できるような関わりを意識して行っている。それが看護師にも浸透しているかは不明である。そこで、当者病棟における指導者の役割を果たすためには何が必要なのかを検討することを目的として、本研究に取り組んだ。

## 2. 研究目的

臨地実習に対する看護師の意識を明らかにすることで、当病棟にとって、指導者と看護師との連携を図るためには何が必要なかの示唆を得る。

当病棟では、老年看護学実習2週間5クール（各3名）、成人看護学実習2日間4クール（各4名）、基礎看護学実習1日間1クール4名を受け入れている。

## 3. 研究方法

(1) 研究デザイン：無記名自記式質問調査研究

(2) 調査対象者：当病棟に勤務する看護師22名

(3) 調査期間：平成29年6月～7月

(4) 質問内容：「①当病棟で行われてきた臨地実習の看護領域（基礎看護学・成人看護学など）について知っていますか。はいorいいえでお答えください。」「②、①ではいと答えた人は、実習目的・目標を知っていますか。はいorいいえでお答えください。」「③、②ではいと答えた人は、実習目的・目標を何から知りましたか。」「④当病棟における臨地実習で、学生と関わったことがありますか。はいorいいえでお答えください。」「⑤学生と関わった時の、具体的な場面をお答えください。」「⑥、⑤の関りから得られたこと、よかったこと、分からなかったこと、困ったことを具体的にお答えください。」「⑦今後、学生と関わるにあたり、あなたが知っておきたいこと、教えてほしいことは何ですか。」の7項目とした。

(5) 調査方法：無記名自記式質問調査を実施した。質問事項の信頼性と妥当性については数名のプレテストを行い、研究者間で検討した。

(6) 分析方法：質問項目①～④は記述統計とし、質問項目⑤～⑦の自由記載については回答内容から実習指導に関する意識について書かれた文脈を抽出し、抽出した文脈を1つの内容で区切り、1内容を1データとした。さらに1データ毎に要約し、コード化、サブカテゴリー、カテゴリー化した。分析にあたって、研究者間の意見が一致するまで話し合いを重ね、信頼性と妥当性を確保した。

## 4. 倫理的配慮

研究対象者には研究の主旨、参加しない権利、途中辞退や中止の権利、プライバシー保護、得られた情報は本研究以外の目的で使用しないこと、研究結果は然るべき学会で発表する予定であること等について研究計画書を用いて説明し、同意書にサインをもらった。同意をもらえた人に関して、研究者が該当病棟の看護師に自由記載を含んだ質問紙調査事項を提示し、筆跡がわからないように病棟用パソコンに入力期限を決めて回答入力してもらうこととした。

本研究は当該倫理委員会の倫理審査を受け承認を得た。開示すべき利益相反関係にある企業はない。

## 5. 結果

調査対象者のうち回答が得られたのは19名、86.3%であった。当病棟で行われてきた臨地実習の看護領域について知っていたのは13名（68.4%）、そのうち実習目標・目的を知っていたのは4名（30.7%）であった。また、実習目的・目標を知る手段としては実習要綱からが3名、事前周知からが1名であった。さらに当病棟における臨地実習で、学生と関わったことがあるのは13名（68.4%）であった。自由記載は、総データ数75から<コード>20、そこから8【サブカテゴリー】、4【カテゴリー】が抽出された。カテゴリーは、【実習指導の醍醐味】、【学生に対する指導力の未熟さ】、【臨地実習に対する興味・関心】、【臨地実習指導者からの周知不足】であった。（表1）

### (1) 【実習指導の醍醐味】

このカテゴリーは、8コードからなり〔指導者として関わったことに対する達成感〕、〔看護師としての自己成長の機会〕、〔看護師の自己研鑽の動機づけ〕の3つのサブカテゴリーで構成された。<エビデンスに基づいた患者ケアに対する指導>や<臨地実習を意識した指導者としての関わり>ができ〔指導者として関わったことに対する達成感〕を感じ、<学生に関わることで臨地実習に対する重要性に気づいた>ことが〔看護師の自己研鑽の動機づけ〕になると捉えていた。また、学生と関わる中で<看護を見直すきっかけ><看護師の看護の振り返り>の機会を得て〔看護師としての自己成長の機会〕になった。

## (2) 【学生に対する指導力の未熟さ】

このカテゴリーは、3コードからなり〔学生に対する教育的な関わりへの不安〕の1つのサブカテゴリーで構成された。主に指導者が実習指導を行っており、看護師が学生に関わる機会も少なく〈不慣れな指導〉になり〔学生に対する教育的な関わりへの不安〕を生じていた。また〈自分がもつ知識に対する不安〉や〈患者の病態把握が未熟なことによる指導力不足の可能性〉も相まって感じていた。

## (3) 【臨地実習に対する興味・関心】

このカテゴリーは、5コードからなり〔指導内容の説明を欲している状態〕、〔看護師が行うべき事前準備の必要性〕の2つのサブカテゴリーで構成された。看護師は〈実習を受け入れるための心構え〉や〈今の時代に応じた教育的な関わり方〉について知りたいと感じており、指導者と看護師、教員の各々の〈役割を明確にしてほしい〉とも語った。さらに具体的な〔指導内容の説明を欲している状態〕であり〔看護師が行う事前準備の必要性〕を感じていた。

## (4) 【臨地実習指導者からの周知不足】

このカテゴリーは、4コードからなり〔学生を受け入れる体制が整っていない〕、〔学生に関わる指導内容の理解不足〕の2つのサブカテゴリーで構成された。看護師は実習に関する周知が不足している〔実習を受け入れる体制が整っていない〕状態で実習指導に携わっており〔学生に関わる指導内容の理解不足〕を感じていた。

## 6. 考察

回答が得られた19名の看護師のうち実習目的・目標まで知っていたのは、わずか4名であった。13名が学生と関わった経験があったことから、看護師への実習に関する周知が不足している状態で実習指導が行われている現状が明らかとなった。また、〔学生に関わる指導内容の理解不足〕や〔実習を受け入れる体制が整っていない〕と感じていることから【臨地実習指導者からの周知不足】が明らかとなった。しかし相反して看護師は、〈実習を受け入れるための心構え〉や〈今の時代に応じた教育的な関わり方〉について知りたいと感じており、指導者と看護師、教員の各々の

〈役割を明確にしてほしい〉とも思っていた。さらに〔看護師が行う事前準備の必要性〕を感じ、具体的な〔指導内容の説明を欲している状態〕であった。これらより看護師は【臨地実習に対する興味・関心】があることがうかがえた。今まで指導者から看護師へ、病棟カンファレンスで周知を行っていたが、口頭で周知するだけでは、その場にはいない看護師には伝わりにくい事が推測される。また看護師は個々に係や委員の役割を担っていることから、詰所に置かれた分厚い実習要綱を自ら手に取り目を通すという行為は、時間的に難しいのではないかと考えられる。これらより実習の意義や職業を伝授するという専門職としての認識が薄いのではないかと感じた。

当病棟では主に指導者が実習指導を行ってきたため、看護師が学生に関わる機会も少ないことから〈不慣れな指導〉になりやすく、〔学生に対する教育的な関わりへの不安〕を生じると考えられる。さらに〈自分もつ知識に対する不安〉や〈患者の病態把握が未熟なことによる指導力不足の可能性〉も相まって【学生に対する指導力の未熟さ】を感じ、実習指導に対する消極性につながると考える。舟越ら<sup>6)</sup>は看護師の経験年数が長い程、学生に看護職の魅力について伝えること、良いモデルになること、また、学生が質問しやすい雰囲気作りや、学生自身が自分の行動を自己評価できるように関わろうとすると述べていることから経験を積み重ねることで、これらの臨地実習に対する負の感情を軽減できると考える。さらに澤田ら<sup>7)</sup>は指導力の不足感のとまどいに対しては、指導者と同じように指導をしなくてもよいことを伝え、看護者としての姿をみせることや看護への思いを伝えることが重要であり、それが学生の看護観の形成に繋がることを意識づけていくことが必要と述べている。このことから看護師の経験に応じた学生との関わり方について伝えることも、看護師の臨地実習に対する負の感情を軽減することに繋がると考える。

一方、〈エビデンスに基づいた患者ケアに対する指導〉や〈臨地実習を意識した指導者としての関わり〉〈実習生との実習の振り返り〉ができたと感じ〔指導者として関わったことに対する達成感〕を得た看護師もいた。実習目的・目標を知った上で、実習指導に

関わった看護師は、これらの感情を抱きやすいと考える。さらに自分自身の<看護を見直すきっかけ><看護師の看護観の振り返り>の機会を得て、<看護師としての知識、技術、姿勢などを再確認できた>と感じた看護師もいた。また税所ら<sup>8)</sup>は自分の看護ケアを見つめ直す機会を得ることは、指導するための知識あるいは自信の獲得に繋がっていくと述べている。実習指導が〔看護師の自己研鑽の動機付け〕や〔看護師としての自己成長の機会〕になると捉えていたことは、<学生に関わることで臨地実習に対する重要性に気づいた>と同様に、これからの学生や後輩指導、さらには看護の質向上にも繋がると考える。これらは【実習指導の醍醐味】であると言える。

さらに佐々木ら<sup>9)</sup>は急性期病院を対象とした研究において「実習指導のやりがい」を指導者は看護師に伝えるとともに看護師自身がやりがいに「気づくことができるよう」に関わることが、より効果的に実習指導を行う人的環境調整のための方略の一助となる可能性があるとして述べている。本研究の対象は障害者病棟で勤務する看護師であり、長期入院している患者・家族と一緒に今後障害をもちながらも自立した生活をどのように送っていくかを考えている。そのため患者の心身の状態だけでなく、生活史や家屋の状況など多くの情報を把握している。さらに日々の関わりを通して患者との人間関係をより良く築くことができた状態で、学生に関わるができる強みがある。これらを活かして患者への直接ケアの場面で、具体的な看護を学生に伝えることができることも障害者病棟での実習指導における醍醐味であると考えられる。

今後、すべての看護師が【実習指導の醍醐味】を感じられるよう実習の意義・目的・目標をはじめとする実習要綱について掲示物の工夫や随時勉強会を取り入れることをしていく必要がある。高田ら<sup>10)</sup>が研究で報告している実習の概要と目標達成のための指導ポイントツールのような、教員と目標や指導方法を共通認識でき、それぞれの役割を具体的に示されたものを検討していきたい。そして実習に対する理解度の向上に努めると共に自己成長に繋がるという事を伝えていかなければならない。

## 7. 結論

- (1) 看護師の3割が実習の目的、目標を知っていた。
- (2) 看護師は実習指導者として関わることで【実習指導の醍醐味】を感じていたが、【学生に対する指導力の未熟さ】も感じていた。
- (3) 看護師は【臨地実習に対する興味・関心】があるが、【臨地実習指導者からの周知不足】を感じていた。
- (4) 看護師が臨地実習に対する意識を高めるために、実習指導者は掲示物の工夫や勉強会などで実習の目的、目標、指導内容、指導方法などを周知し、指導環境を整えていくことが必要である。

【出典先】第49回日本看護協会看護教育学会集にて発表

### 【引用文献】

- 1) 山田聡子, 太田勝正: 第2回看護教育専門家から臨地実習指導者への役割期待. 看護教育 54:756-760, 2013
- 2) 澤田理紗, 古田佳奈代, 藤枝徳子: 看護学生の臨地実習に携わる病棟看護師のとまどい—フォーカスグループインタビューによる病棟看護師の語りから—. 第45回日本看護学会論文集(看護教育): 174-177, 2015
- 3) 税所三智, 平見愛, 木虎聡美, 他: 臨地実習指導者の役割を持たない病棟看護師が実習指導において抱く思いや経験—実習指導者としての支援の検討—. 第44回日本看護学会論文集(看護教育): 149-152, 2014
- 4) 鈴木洋子, 山下麻土香, 高野恵理, 他: 看護学実習における看護職者の役割認識と関わりの実態調査. 第44回日本看護学会論文集(看護教育): 146-148, 2014
- 5) 治田裕子, 米田恭子, 内田有香, 他: 臨地実習における看護師の役割とその実態. 第43回日本看護協会学会論文集(看護教育): 118-121, 2013
- 6) 舟越和代, 斎藤静代, 吉本知恵, 他: 臨地実習における実習指導者の指導に関する意識. 香川県立医療短期大学紀要 5: 59-68, 2003

- 7) 前掲書2)  
 8) 前掲書3)  
 9) 佐々木満智子, 中谷信江, 井上真奈美, 他: 看護学臨地実習で実習指導者がとらえた実習指導のやりがい. 山口県立大学学術情報看護栄養学部紀要 11:

67-72, 2018

- 10) 高田幸江, 高橋奈津子, 松本文奈: 病棟実習と外来実習を組み合わせた成人看護学実習(慢性期)における指導体制強化に向けた取り組み, 聖路加国際大学紀要 1: 40-45, 2015

表1 臨地実習に対する看護師の意識

【カテゴリー】	〔サブカテゴリー〕	<コード>
実習指導の醍醐味	指導者として関わったことに対する達成感	エビデンスに基づいた患者ケアに対する指導
		臨地実習を意識した指導者としての関わり
		実習生との実習の振り返り
	看護師としての自己成長の機会	看護を見直すきっかけ
		看護師の看護観の振り返り
	看護師の自己研鑽の動機付け	看護師としての知識、技術、姿勢などを再確認できた
		学生に関わることで臨地実習に対する重要性に気づいた
		学生と患者との関わりに接して学んだ
	学生に対する指導力の未熟さ	学生に対する教育的な関わりへの不安
自分をもつ知識に対する不安		
患者の病態把握が未熟なことによる指導力不足の可能性		
臨地実習に対する興味・関心	指導内容の説明を欲している状態	実習で行える看護技術の内容を習得したい気持ち
		指導内容の統一の必要性
	看護師が行うべき事前準備の必要性	実習を受け入れるための心構え
		役割を明確にしてほしい
		今の時代に応じた教育的な関わり方
臨地実習指導者からの周知不足	実習を受け入れる体制が整っていない	臨地実習の目的・目標を理解していない
		指導方法を理解していない
		実習の流れを理解していない
	学生に関わる指導内容の理解不足	看護師の業務目線で関わった可能性